



Title	コリャーク語動詞の自他対応 : 中立型か他動詞化型か
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 3, 85-109
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/52603">http://hdl.handle.net/2115/52603</a>
Type	bulletin (article)
File Information	07_KUREBITO.pdf



[Instructions for use](#)

コリヤーク語動詞の自他対応  
—中立型か他動詞化型か—

呉 人 恵  
(富山大学)

1. はじめに

本稿<sup>1</sup>では, コリヤーク語 (Koryak: チュクチ・カムチャツカ語族) の自他対応関係を形態的・統語的観点から記述し, その特徴について予備的な類型論的位置づけを試みる。

コリヤーク語の動詞の自他対応については, 今のところ網羅的に記述したのも, 類型論的に位置づけたのも管見のかぎりみあたらない。一方, 同系のチュクチ語の自他対応に関してはすでに記述言語学的立場からの掘り起しも (Skorik 1977, 呉人徳司 [1997, 2001, 2009], Kurebito, T. [2008, 2012]), 類型論的立場からの位置づけ(Nichols et al. 2004) もおこなわれてきている。理論研究においてはチュクチ・カムチャツカ語族の代表としてしばしばチュクチ語が取り上げられることが多いが, 自他対応についても例外ではない。

とはいえ, これらのチュクチ語に関する知見と筆者がコリヤーク語について調べた結果を比較してみると, データの扱いに関していくつかの検討すべき問題点が浮き彫りになってくる。なかでもチュクチ語やコリヤーク語の類型論的位置づけを左右するという意味で重要なのが, 自動詞を派生する *-et/-at* と他動詞を派生する *j-..ev/-av* (ただし, チュクチ語では *j-* は *r-*) という対応関係の捉え方に関してである。コリヤーク語とチュクチ語の両形を対応させた (1) を見られたい。コリヤーク語の例は筆者の収集したもの, チュクチ語の例は呉人徳司 (1997:87) による。ちなみに, コリヤーク語とチュクチ語では若干の音韻的な違いはあるものの同じ語が対応しており, 類似性が高い。

(1) コリヤーク語	チュクチ語	
kaŋ-at/j-ə-kaŋ-av	keŋ-et/ r-ə-keŋ-ew	「曲がる」 / 「曲げる」
ŋəl-et/j-ə-ŋəl-ev	ŋl-et/r-ə-ŋl-ew	「燃える」 / 「燃やす」
pəʔəpəʔ-et/j-ə-pəʔəpəʔ-ev	pəʔəpəʔ-et/r-ə-pəʔəpəʔ-ew	「沸く」 / 「沸かす」
umek-et/j-umek-ev	umek-et/r-umek-ew	「集まる」 / 「集める」
cim-at/j-ə-cim-av	sim-et/r-ə-sim-ew	「壊れる」 / 「壊す」

<sup>1</sup> 本稿は, 科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」 (代表: 津曲敏郎 [北海道大学], 22320075) により, 2012年2月28日~3月6日ならびに10月8日~10月15日にロシア連邦ハバロフスク市でおこなったコリヤーク語聞き取り調査に基づき書かれたものである。調査には, Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏 (1955年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第5トナカイ遊牧ブリガード生まれ, 女性) にコンサルタントとして協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。

なお, 本稿の対象となるコリヤーク語は, チャウチュヴァン (cawcəvan) 方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり: /p, t, t', k, q, v, ʔ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə, /t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [tʃ]。

呉人徳司 (1997) は、このような-et/-at と j..-ev/-av の対応関係を、共通語幹から自他ともに派生が生じる両極化 (equipollent) のパターンを示すものとして捉えている。また、80 言語の 18 の動詞の自他対応ペアを取り上げ、類型論的視点から論じた上記の Nichols et al. (2004) ではチュクチ語の具体的なデータが示されていないため断言はできないが、4 節で後述するように、無生物動詞の自他対応で最も顕著なパターンとして両極化があげられていることから、(1) のような動詞ペアを両極化に分類していると推測される。

しかし、この対応を両極化とみなすと、いくつかの問題が生じる。とりわけ、多くの自他動詞ペアにこの形態的対応がみられるため、これを両極化とみなすか否かはコリヤーク語 (やチュクチ語) の自他対応の類型化にもかかわることになる。したがって、まずは自他対応についてできるかぎり網羅的に記述したうえで、対応のパターンの特定にあたりどのような問題点が生じるのか、また、それはどのように解決しうるかについて、特に-et/-at と j..-ev/-av の対応関係の問題を中心に十分に検討しておく必要がある。

本稿の構成は次のとおりである。第 2 節では、コリヤーク語ならびに同系のチュクチ語、アリュートル語、イテリメン語の自他対応に関する先行研究を検討し、これまでに明らかになっている点と未解決の点を洗い出し整理する。第 3 節では、本題に入る前に、コリヤーク語の典型的な自動詞文・他動詞文の形態的・統語的輪郭を概観する。第 4 節では Nichols et al. (2004) の 18 の自他動詞ペアに対応するコリヤーク語をあげ、チュクチ語に関する Nichols et al. (2004) の類型化との相違や問題点について検討する。第 5 節では、コリヤーク語の自他対応のパターンをできるだけ網羅的に記述する。第 6 節では、上記の類型論的先行研究に照らして、コリヤーク語動詞自他対応の類型化の可能性を提案する。

ところで、自他対応パターンに対する名称は先行研究によりまちまちで、統一されていない。そこで、本稿では混乱を避けるため、名称の統一を図る。すなわち、便宜的により一般的な Haspelmath (1993) の名称を和訳して用いるものとする (表 1)<sup>2</sup>。なお、表 1 には Nichols et al. (2004) の対応する名称もあげてある。ただし、本稿で Nichols et al. (2004) に言及する際には、それらの名称を用いることはせず、対応する Haspelmath (1993) の名称を一貫して用いるものとする。なお、Haspelmath (1993) では、Nichols et al. (2004) があげている *ablaut*, *conjugational change*, *adjective* に対応する名称はないが、コリヤーク語にはこれらのパターンは存在しないため、さしあたり記述上の問題は生じないと判断する。

表 1: 自他対応パターンの名称

	Haspelmath (1993)	Nichols et al. (2004)
Directed	causative (使役化)	augmented (拡張化)
	anticausative (逆使役化)	reduced (縮小化)
Non-directed	-----	ablaut (アブラウト)
	equipollent (両極化)	auxiliary change (補助動詞変換)
		double derivation (二重派生)
	suppletive (異根動詞)	suppletion (異根動詞)
	labile (自他同形)	ambitransitive (両方向的他動詞化)
	-----	conjugational change (活用変移)
-----	adjective (形容詞)	

<sup>2</sup> ちなみに、Comrie (2006) は、Haspelmath (1993) にならった名称を使用している。

次に、本稿で扱う自他動詞対応ペアの範囲を限定しておく。類型論の先行研究ではすべての自他対応のペアが対象となっているわけではない。たとえば、Haspelmath (1993) は対象を inchoative verb (起動動詞) と causative verb (使役動詞) のペアに限定している。Haspelmath (1993) によれば、このペアはいずれも状態の変化を表すが、前者が変化を引き起こした動作主を排除し、変化を自発的に発生したものとするのに対して、後者は変化を引き起こした動作主を含む点で異なる。すなわち、自動詞の S が他動詞の O に対応するような次のようなペアを指す。

(2a) (inchoative) The stick broke.

(2b) (causative) The girl broke the stick.

(Haspelmath 1993:90)

一方、Nichols et al. (2004:156) は、起動動詞のみならず状態動詞と使役動詞のペアも考察の対象に含めているが、自動詞の S が他動詞の O と対応するペアのみを扱っている点では Haspelmath (1993) と同じである。さらに、Nichols et al. (2004) は、他動詞化 vs 脱他動詞化には二つの異なる場合、すなわち、A の追加や削除を起こす場合 (A-affecting lexical valence orientation, 以下、A-affecting と略) と、O の追加や削除を起こす場合 (O-affecting lexical valence orientation, 以下、O-affecting と略)<sup>3</sup> があるが、このうち考察の対象となるのは、前者のみであるとしている。

コリヤーク語では、A-affecting タイプに加え、O-affecting タイプである脱他動詞化、すなわち逆受動化がきわめて生産的かつ多様におこなわれる。したがって、これを自他対応関係の議論から外すわけにはいかない。ただし、これについては別稿で論じることにし、本稿では Haspelmath (1993), Nichols et al. (2004) にならい、まずは A-affecting タイプのみを考察の対象とする。

## 2. 先行研究

以下では、コリヤーク語ならびに同系諸言語の自他対応について、先行研究でどのようなパターンがこれまでに掘り起こされ記述されてきたかに注目して見ていく。

### 2.1. コリヤーク語の自他対応

コリヤーク語の自他対応については先行研究の蓄積がきわめて少ない。コリヤーク語の主たる文法書である Zhukova (1972) でも一部の自他対応について記述されているだけである。すなわち、A-affecting タイプでは、使役化 (mejjetək 「育つ」→jəmejjetək 「育てる」、cimatək 「壊れる」→jəcimatək 「壊す」など) と自他同形 (ŋəvok 「始まる」「始める」など) があげられているのみである。ちなみに、O-affecting タイプでは、接頭辞 ine-/ena- による逆受動化 (tiŋuk [他] →inetiŋuk [自] 「引きずる」、ekmitək [他] →inekmitək [自] 「取る」など) があげられているだけで、その他の逆受動化接辞 (-cet, -tku/-tko) については触れられてい

<sup>3</sup> Nichols et al. (2004) では、O-affecting lexical valency orientation とは明記されていないが、A-affecting lexical valency orientation との対比から明らかのため、本稿ではこのように記するものとする。

ない。また、接辞以外の逆受動化の手段である名詞抱合や語彙的接辞についての言及もない。さらに、自他同形のパターンには A-affecting と O-affecting の両タイプがあるが、Zhukova (1972) では上述の A-affecting タイプ (ɲəvok「始まる」「始める」) が O-affecting タイプ (pəŋlok「尋ねる」「～を尋ねる」) と区別されないまま列挙されるにとどまっている。

このように、自他対応に関する記述として、Zhukova (1972) は網羅的かつ体系的なものとはいえない。しかし、この他にコリャーク語の自他対応を専門に扱った研究も見られない。

## 2.2. チュクチ語の自他対応

同系のチュクチ語動詞の自他対応については、後述のようにすでいくつかの重要な記述言語学的、類型論的研究がある。記述研究では、使役化について論じた Inenlikej et al. (1969) のような個別的な研究がある一方で、自他対応関係を包括的に記述してきた呉人徳司 (1997, 2001, 2009), Kurebito, T. (2008, 2012) の一連の研究がある。ちなみに、呉人徳司 (1997) では、使役化、逆受動化、逆使役化、両極化、自他同形、軽動詞、補充法が報告されている。ただし、逆受動化もその中で混然と論じられており、A-affecting タイプと O-affecting タイプが区別されないまま記述がおこなわれている<sup>4</sup>。

さらに、類型論的視点からは、上述のように Nichols et al. (2004) が 18 の動詞について 80 言語の自他対応関係のタイプを考察した際、通言語的なコンテキストの中にチュクチ語を位置づけようとした試みも見られる (詳細は第 4 節を参照)。このように、チュクチ語の自他対応に関する研究は他の同系言語に比して大きく先んじている。

## 2.3. アリュートル語の自他対応

かつてはコリャーク語の一方言と見られていたアリュートル語動詞の自他対応についての記述は、Nagayama (2003), Kibrik et al. (2004) に見られる。このうち、Nagayama (2003) では、他動詞から自動詞を派生する接頭辞として ina-, 他動詞を形成する軽動詞として ləŋəkki 「みなす」があげられている。ただし、自他対応に関する他の記述はみられない。ちなみに、このうち ina- は直接目的語の降格の引き金となる逆受動化接頭辞であり、3 項動詞では他動詞活用が保持されるため、他動詞から自動詞を派生するという説明は厳密には正確ではない。ただし、Nagayama (2003:25) では、2 項動詞でありながら、ina- が付加されても他動詞活用が保持されている例が数例あげられており、大変興味深い。

一方、Kibrik et al. (2004) では、主として使役化、接辞や名詞抱合による逆受動化、自他同形についての記述はあるが、その他のパターンについての言及は見られない。さらに、Koptjevskaja-Tamm & Muravyova (1993) は、アリュートル語の使役と抱合について論じているが、使役化の方法として使役化接辞と自他同形があげられているのみであり、包括的な記述にはなっていない。

---

<sup>4</sup> 逆受動化のみを取り上げ、詳細に論じたものとして Kozinsky, Nedjalkov and Polinskaja (1988) があげられる。

## 2.4. イテリメン語の自他対応

語族の中で最南端に分布するイテリメン語は、音韻的にも文法的にも語族の他言語とは異質な性格を示すが、自他対応についても同様である。小野 (2001) は、自身が集めたイテリメン語南部方言のデータをもとに動詞の自他対応関係を洗い出し、それぞれのパターンと他動性の程度の相関性について検討を加えている。そこでは、使役化、逆受動化、自他同形の 3 つのパターンがあげられている。ただし、他動詞目的語を自動詞主語化する逆使役化は見られず、代わりに受け身文が多用されるとしている。このように受け身文を持つ点で、イテリメン語は他の同系諸言語とは異質な特徴を有するといえる。

## 3. 自動詞文・他動詞文の形態的・統語的特徴

本節では、本稿の主テーマに入る前に、まず、コリヤーク語の典型的な自動詞文・他動詞文の形態的・統語的特徴を概観しておく。

コリヤーク語は二重標示タイプを示し、主語、目的語といった文法関係が名詞、動詞のいずれの側でも示される。まず名詞の側のふるまいから見る。コリヤーク語は格標示に関しては一貫した能格タイプを示す。すなわち、自動詞主語と他動詞目的語は絶対格を、他動詞主語は能格を取る。ただし、能格専用の標識をもつのはおそらく人称代名詞のみで、その他の名詞では有生性の階層に応じて、場所格あるいは道具格が能格標示に代用される。名詞は能格がどのような形式的標示を受けるかにより、大きく次の 4 つに分類される。

- A) 独自の能格標識  $-nan^5$  をもつ名詞
- B) 能格に場所格  $-k$  が代用され、有生の標示  $-ne/-na$  (単),  $-jək$  (複) を受ける名詞
- C) 能格として任意に場所格も道具格もとり、有生の標示も任意である名詞
- D) 能格に道具格  $-te/-ta$  が代用され、有生の標示を受けない名詞

このうち、A) の独自の能格標識をもつ名詞には人称代名詞、B) の場所格が代用される名詞には、人間や家畜を表す固有名詞、疑問代名詞「だれ」、親族呼称、C) の任意に場所格、能格いずれもが付加される名詞には、普通人間名詞、指示代名詞、「どの」を表す疑問代名詞など、D) の道具格が代用される名詞には、親族名称、動物名詞、無生物名詞、それぞれ含まれる (表 2 参照)。能格標示の違いに反映されるこのような名詞の区別は、これまでシルバーステイン (Silverstein 1976) らによって指摘されてきたいわゆる名詞句階層におおよそ対応している (呉人恵 2002)。

表 2 コリヤーク語の能格標示の違いによる名詞の分類

	A	B	C	D
能格標識	$-nan$	$-ne/-na-k, -jək-ə-k$	$-ne/-na-k, -jəka-k\sim-te/-ta$	$-te/-ta$
名詞	人称代名詞	固有名詞 疑問代名詞「誰」 親族呼称	人間名詞 指示代名詞 疑問代名詞「どの」	親族名称 動物名詞 無生物名詞

<sup>5</sup> 人称代名詞にのみつくこの能格標識が、有生の  $-na$  と固有名詞や親族呼称について所有形を作る  $-n$  の結合したものである可能性も否定できない。

次の (3) は人称代名詞, (4) は場所格を取る固有名詞, (5) は定か不定により場所格も道具格も取る人間名詞, (6) は道具格を取る動物名詞の例である。

- (3) Mocy-ə-nan məc-ca-jta-la-ŋ-ə-n əjava-k  
 1PL-E-ERG 1PL.A-FUT-go.for-PL-FUT-E-3SG.O remote.place-LOC  
 va-lʔ-ə-n ineŋ-Ø  
 be-NML-E-ABS.SG cargo.sleigh-ABS.SG  
 「私たちはずっと向こうにある貨物用橇を取りに行こう」

- (4) L'aŋe-na-k tejk-ə-ni-n-Ø icʔ-ə-n  
 Ljage-AN.SG-LOC(ERG) make-E-3SG.A-3SG.O-PF fur.coat-E-ABS.SG  
 qəlavol-ə-ŋ  
 husband-E-DAT  
 「リヤゲ (女性名) は夫に毛皮コートを縫った」

- (5) El'ʔa-ta / el'ʔa-na-k yəcci  
 woman-INSTR(ERG) woman-AN.SG-LOC(ERG) you(ABS.SG)  
 ne-ku-ʔejŋew-wi  
 INV-IPF-call-2SG.O  
 「ある女 / その女がお前を呼んでいる」

- (6) ŋanko qoja-ta ku-nu-ŋ-ni-n pəʔo-n  
 there reindeer-INSTR(ERG) IPF-eat-IPF-3SG.A-3SG.O mushroom-ABS.SG  
 「あそこでトナカイがキノコを食べている」

次に動詞の側について見る。動詞の文法範疇には、テンス、アスペクト、ムード、ヴォイス、人称がある。動詞の屈折形式は基本的には完了 / 未完了というアスペクトと未来 / 非未来というテンスが組み合わさってできている。自動詞では主語の、他動詞では主語と目的語の人称の標示がなされる。このような動詞の活用があることにより、動詞の自他は形の上で明確に区別される。また、そのため、対応する自立の人称代名詞の出現は義務的ではない。また、語順も比較的的自由である。

表 3: 自動詞 *tawjiŋ* 「咳する」の屈折形式 (1SG. S. IND)

Perfect	Non-future		Future
	Resultative	Aorist	
	ya-tawjiŋ-iyəm	t-ə-tawjiŋ-ə-k	t-ə-ja-tawjiŋ-ə-ŋ
Imperfect	t-ə-ku-tawjiŋ-ə-ŋ		t-ə-ja-tawjiŋ-eke

表 4: 他動詞 *pŋəlo* 「尋ねる」の屈折形式 (1SG. S/A; 3SG. O. IND)

Non-future			Future
Perfect	Resultative	Aorist	t-ə-ja-pŋəlo-ŋ-ə-n
	ɣa-pŋəlo-len-Ø	t-ə-pŋəlo-n-Ø	
Imperfect	t-ə-ko-pŋəlo-ŋ-ə-n		t-ə-ja-pŋəlo-jk-ə-n

ただし、名詞の格標識とは異なり動詞の人称標示は、部分的な能格を示す。すなわち、能格タイプを示すのは2人称双数・複数のみで (7)(8)、それ以外は主格・対格タイプを示す (9)(10) (例文のイタリックが人称標示部分である)。

- (7) (Tuji) qol-tək-Ø.  
2DU.ABS stand.up-2DU.S-PF  
「あなたたち二人は立ち上がった。」
- (8) Mucy-ə-nan (tuji) mət- uŋet-tək-Ø  
1PL-E-ERG 2DU.ABS 1PL.A-wait-2DU.O-PF  
「私たちはあなたたち二人を待った。」
- (9) (ɣəmmo) t-ə-lqut-ə-k.  
1SG.ABS 1SG.S-E-stand.up-E-PF  
「私は立ち上がった。」
- (10) (ɣəm-nan) (ənnə) t-uŋet-ə-n-Ø.  
1SG-EGR 3SG.ABS 1SG.A-wait-E-3SG.O-PF  
「私は彼／彼女を待った。」

#### 4. Nichols et al. (2004) によってみるコリヤーク語の自他対応

本節では、まずは、コリヤーク語のデータを Nichols et al. (2004) の類型論的研究に照らし、てみておきたい。Nichols et al. (2004) は、世界のさまざまな地域から選んだ 80 の言語について 18 の起動動詞・状態動詞と使役動詞の対応関係の類型化を試みている。そこでは上表 1 にあげた 9 種類の対応パターンをあげ、これをさらに大きく次の 4 つのタイプに分類している。

- (a) detransitivization (脱他動詞化) : 他動詞から自動詞を派生するタイプ (=逆使役化)
- (b) transitivity (他動詞化) : 自動詞から他動詞を派生するタイプ (=使役化)
- (c) indeterminate (不確定) : 自他同形, 補充法, 活用変移
- (d) neutral (中立) : 両極形 (補助動詞変換を含む), アプラウト

Nichols et al. (2004) によれば、言語サンプルからみると、世界的には中立タイプが最も多



く、次に不確定タイプ、他動詞化タイプ、脱他動詞化タイプと続く。また、ヨーロッパの諸言語には一般的には珍しい脱他動詞化タイプが比較的多く、逆に北アジアの諸言語には他動詞化タイプの言語が多い。Nichols et al. (2004) はさらに、これらの自他の形態的タイプは、語彙のみならず、当該言語の統語現象や文体的特徴などにも反映される可能性があるとしている。形態的タイプがどのようにその言語の統語現象に反映されているかについては別稿での考察にゆずるとして、ここでは、形態的タイプをどのように決めるべきかを個別言語の記述研究の立場から検討してみたい。

Nichols et al. (2004) は、次の 18 の動詞ペアが 80 の言語でどのように対応しているか調査した。18 の動詞ペアは有生物動詞 9 ペア、無生物動詞 9 からなり、そのそれぞれについてタイプが特定されている。

- (11) 1) laugh/make laugh, amuse, strike as funny, 2) die/kill, 3) sit/seat, have sit, make sit, 4) eat/feed, give food, 5) learn, know/teach, 6) see/show, 7) be/become angry/anger, make angry, 8) fear, be afraid/frighten, scare, 9) hide, go into hiding/hide, conceal, put into hiding【有生物動詞】, 10) (come to) boil/(bring to) boil, 11) burn, catch fire/burn, set fire, 12) break/break, 13) open/open, 14) dry/make dry, 15) be/become straight/straighten, make straight, 16) hang/hang up, 17) turn over/turn over, 18) fall/drop, let fall 【無生物動詞】

この 80 言語の中にはコリヤーク語は含まれていないが、同系のチュクチ語も含まれている。その分析の結果をわかりやすくまとめると次表 5 のようになる。なお、Nichols et al. (2004) では、チュクチ語にはない対応パターンもゼロとしてあげているが、ここでは便宜的に割愛する。

表 5：チュクチ語の自他対応の形態的タイプ

	使役化	逆使役化	両極形	補充法	n.d	高	タイプ
有生	5	0	1	2	1	--	--
無生	2.5	3	4.5	1	0	両極形	中立

上表では、チュクチ語では有生動詞の場合には特定のタイプがなく、無生物動詞の場合には Double すなわち、両極形が優勢で中立的タイプを示すとされている。

一方、同じ 18 の動詞ペアがどのような対応関係をなすかをコリヤーク語についてみると、チュクチ語と比較する以前に、形態的な対応をどのパターンとみなすかに問題があり、容易にタイプを特定することができないことがわかる。そこで、まずは問題の所在を明らかにしておく必要がある。

筆者はロシア語を媒介言語として聞き取り調査をおこなっているため、正確を期すために Nichols et al. (2004) が言語サンプルのひとつとしてあげているロシア語例を用いて聞き取りをおこなった。また、18 の動詞ペアを正確に抽出するために Nichols et al. (2004: 187-188) が示している標準的な例文をコリヤーク語に訳してもらい、得られた動詞と同じであることを確認した。このようにして、Nichols et al. (2004) の期待している動詞ペアに可能な限り

近づけるようにして得られたコリヤーク語の動詞ペアは下表 6 のとおりである。右側にはそれぞれの動詞ペアの対応パターンを示す（語末の -k は不定形を示す）。

表 6 : Nichols et al. (2004) に基づくコリヤーク語の 18 の動詞の自他対応ペア

	Plain	Induced	Pattern
1	acacy-at-ə-k 'laugh'	j-acacy-av-ə-k 'make laugh'	CorE?
2	viŋ-ə-k 'die'	təm-ə-k 'kill'	S
3	vayal-ə-k 'sit'	j-ə-vayal-at-ə-k 'seat'	C
4	ewji-k 'eat'	j-ewj-et-ə-k 'feed'	C
5	γəjul-et-ə-k 'learn'	j-ə-γəjul-ev-ə-k 'teach'	CorE?
6	ləŋu-k 'see'	j-ə-γəjiv-et-ə-k 'show'	S
7	ŋot-av-ə-k 'be/become angry'	j-ə-ŋot-av-ə-k 'anger'	C
8	wejulŋ-et-ə-k 'fear'	j-ə-wejulŋ-ev-ə-k 'frighten'	CorE?
9	piq-ə-k 'hide'	j-ə-jilp-et-ə-k 'hide'	S
10	pəγəpγ-et-ə-k '(come to)boil'	j-ə-pγəpγ-ev-ə-k '(bring to) boil'	CorE?
11	kenγ-et-ə-k 'burn'	j-ə-kenγ-ev-ə-k 'burn'	CorE?
12	məce-tku-k 'break'	məce-tku-k 'break'	L
13	wəŋjəjp-ə-k 'open'	wəŋjəjp-ə-k 'open'	L
14	pəŋa-k 'dry'	j-ə-pŋa-v-ə-k 'make dry'	C
15	ŋemjiji-k 'be/become straight'	j-ə-ŋemjij-et-ə-k 'straighten'	C
16	jop-ə-tva-k 'hang'	j-ə-jop-at-ə-k 'hang'	CorE?
17	qamanc-it-ə-k 'turn over'	j-ə-qamanc-iv-ə-k 'turn over'	CorE?
18	ajat-ə-k 'fall'	j-ajat-ə-k 'drop'	C

\*C=causative (使役化), E=equipollent (両極化), L=labile (自他同形), S=suppletion (補充法)

18 ペアの示すパターンの内訳は、使役化か両極化かの判定が難しいペア (C or E?) が最も多く 7 ペア (39%), 次に使役化 (C) が 6 ペア (33%), 補充法 (S) が 3 ペア (16%), 自他同形 (L) が 2 ペア (12%) と続く。パターンの判定が難しいペアが一番多いということは、コリヤーク語がどのような自他対応のタイプを示すかを決めるのに支障をきたすことを意味する。問題となる動詞ペアは、たとえば 1 の acacy-at-ə-k 'laugh'/j-acacy-av-ə-k 'make laugh' のように、同一語幹 acacy 「笑い」から -at により自動詞が、j-.-av により他動詞が派生されているパターンである。たしかに表面的には両極化の例のように見えるが、果たしてそうであろうか?

一方, Nichols et al. (2004) で取り上げられているチュクチ語ではどうであろうか? Nichols et al. (2004) では、チュクチ語のどのような動詞が選ばれたかが明記されていないが、呉人徳司 (1997) などの記述をみるかぎり、チュクチ語にもコリヤーク語と同様の問題が存在していることがうかがえる。

次に, Haspelmath (1993) の 31 の inchoative/causative の動詞ペアについてみる。Haspelmath

(1993) は、できごとを引き起こす外的な力の存在が考えられる動詞の場合には逆使役が、逆に外的な力がなくても自発的に起こることを意味する動詞の場合には使役化が好まれるとの仮説をたてた。そのうえで、諸言語で辞書によって容易に特定しうる基本的な意味をもつ 31 の inchoative/causative の動詞ペアを選び、これを自発性の高い順に並べている。

- (12) 1) boil (intr.)/(tr.), 2) freeze (intr.)/(tr.), 3) dry (intr.)/(tr.), 4) wake up (intr.)/(tr.), 5) go out/put out, 6) sink (intr.)/(tr.), 7) learn/teach, 8) melt (intr.)/(tr.), 9) stop (intr.)/(tr.), 10) turn (intr.)/(tr.), 11) dissolve (intr.)/(tr.), 12) burn (intr.)/(tr.), 13) be destroyed/destroy, 14) fill (intr.)/(tr.), 15) finish (intr.)/(tr.), 16) begin (intr.)/(tr.), 17) spread (intr.)/(tr.), 18) roll (intr.)/(tr.), 19) develop (intr.)/(tr.), 20) get lost/lose, 21) rise/raise, 22) improve (intr.)/(tr.), 23) rock (intr.)/(tr.), 24) connect (intr.)/(tr.), 25) change (intr.)/(tr.), 26) gather (intr.)/(tr.), 27) open (intr.)/(tr.), 28) break (intr.)/(tr.), 29) close (intr.)/(tr.), 30) split (intr.)/(tr.), 31) die/kill

このリストを用いて、コリャーク語の動詞ペアの自他対応パターンを概観する。その際、Haspelmath (1993) で英語で示されている各動詞のペアを *Oxford Russian Dictionary* (1997) にもとづきロシア語訳し、『ロシア語－コリャーク語辞典』である Zhukova (1967) で、対応するコリャーク語を特定するという手順をとった。なお、たとえば「壊れる／壊す」「割れる／割る」「折れる／折る」のように多義的な break は、コリャーク語では複数の動詞に対応しており、このうちどの意味に対応させるか決められない場合があるなど、問題もある。ただし、ここでは、便宜的に「壊れる／壊す」「割れる／割る」のいずれにも対応する動詞を選んだ。

表 7 : Haspelmath (1993)によるコリャーク語の自他対応

1.	pəyəpy-et-ə-k/j-ə-pyəpy-ev-ə-k	'boil (intr.)(tr.)'	CorE?
2.	qit-ə-k / j-ə-qit-av-ə-k	'freeze (intr.)(tr.)'	C
3.	pəŋa-k / j-ə-pŋa-v-ə-k	'dry (intr.)(tr.)'	C
4.	kəjev-ə-k / j-ə-kjev-ə-k	'wake up (intr.)(tr.)'	C
5.	eto-k / ηəto-k	'go out/put out'	S
6.	pəlq-at-ə-k / j-ə-pəlq-av-ə-k	'sink (intr.)(tr.)'	CorE?
7.	yəjul-et-ə-k / j-ə-yəjul-ev-ə-k	'learn/teach'	CorE?
8.	ləy-ə-k / j-ə-ly-at-ə-k	'melt (intr.)(tr.)'	C
9.	nəvil-ə-k / j-ə-nn'əvil-et-ə-k	'stop (intr.)(tr.)'	C
10.	kawja-k / j-ə-kawja-v-ə-k	'turn (intr.)(tr.)'	C
11.	ləy-ə-k / j-ə-ly-at-ə-k	'dissolve (intr.)(tr.)'	C
12.	ηəl-et-ə-k / j-ə-ηl-ev-ə-k	'burn (intr.)(tr.)'	CorE?
13.	cim-at-ə-k / j-ə-cim-av-ə-k	'be destroyed/destroy'	CorE?
14.	jəlli-k / j-ə-cŋ-et-ə-k	'fill (intr.)(tr.)'	S
15.	pəlitku-k / pəlitku-k	'finish (intr.)(tr.)'	L

16.	ŋəvo-k / ŋəvo-k	‘begin (intr.)(tr.)’	L
17.	ʕemji-t-ə-k / j-ə-ʕemji-tku-v-ə-k	‘spread (intr.)(tr.)’	CorE?
18.	kəmʕəli-k / j-ə-kəmʕəli-v-ə-k	‘roll (intr.)(tr.)’	C
19.	kawjatoja-k / j-ə-kawjatoja-v-ə-tko-k	‘develop (intr.)(tr.)’	C
20.	temŋ-ev-ə-k / j-ə-tumŋ-ev-ə-k	‘get lost/lose’	C
21.	ʕəcyol-at-ə-k / j-ə-ʕəcyol-av-ə-k	‘rise / raise’	CorE?
22.	mel-ə-tvi-k / j-ə-mel-təv-et-ə-k	‘improve (intr.)(tr.)’	C
23.	qewjilu-k / j-ə-qewjilu-v-ə-k	‘rock (intr.)(tr.)’	C
24.	kəlt-ə-k / ləʕuvəlŋ-ə-k əcyelvəŋ	‘connect (intr.)(tr.)’	S
25.	alvaŋ nəʕel-ə-k / alvaŋ jəcc-ə-k	‘change (intr.)(tr.)’	S
26.	cocm-av-ə-k / j-ə-cocm-av-ə-k	‘gather (intr.)(tr.)’	C
27.	waŋjojp-ə-k / waŋjojp-ə-k	‘open (intr.)(tr.)’	L
28.	cima-t-ə-k / j-ə-cima-v-ə-k	‘break (intr.)(tr.)’	E
29.	taktəŋ-ə-k / taktəŋ-ə-k	‘close (intr.)(tr.)’	L
30.	kocy-ə-ŋta-k / kocy-ə-k	‘split (intr.)(tr.)’	A
31.	viŋ-ə-k / t-ə-m-ə-k	‘die/kill’	S

\*A=anticausative

上表7であげた31の動詞ペアのうち、7番目の melt (intr.)(tr.) と11番目の dissolve (intr.)(tr.) では同じ動詞形が得られたため、1つと数える。したがって、全動詞ペア数は30となる。この30の動詞ペアの自他対応のうち、使役化 (C) が最も多く13ペア (43%)、次に使役化か両極形かの判断がつかないものが7ペア (23%)、補充法 (S) 5ペア (13%)、自他同形 (L) 3ペア (13%)、逆使役化 (A) 2ペア (7%) と続く。この結果を見るかぎりでは、コリヤーク語は transitivizing タイプが優勢な言語であるといえる。しかし、Nichols et al. (2004) と同様に使役化とみるか両極化とみるか判断が難しいペアも多く、即断はできない。

## 5. コリヤーク語の自他対応パターン

第4節で指摘された自他対応のタイプを判定する際の問題については第6章で詳しく考察するとして、以下では、これまでの筆者の調査で明らかになったコリヤーク語動詞の自他対応パターンを、どのパターンが優勢かはさておき、できる限り網羅的に記述する。筆者のこれまでの調査では、次の6種類のパターンが観察されている。

- (a) 使役化 causative : 自動詞+接辞→他動詞
- (b) 逆使役化 anticausative : 他動詞+接辞→自動詞
- (c) 自他同形 labile : 自動詞=他動詞
- (d) 補充法 suppletive : 自動詞語根≠他動詞語根
- (e) 使役化 causative? 両極化 equipollent?

## 5.1. 使役化

自動詞語幹から接辞付加により他動詞が派生される使役化には、接頭辞 *j-* が関わっている。ただし、自動詞語幹に *j-* だけが付加される例は非常に少なく、管見のかぎり 1 例のみである。通常は、*j-* とともに接尾辞 *-ev/-av* あるいは *-et/-at* が現れる（自動詞語幹が母音で終わる場合には、一般的に *-ev/-av, -et/-at* の初頭母音は脱落）。すなわち、① *j-*, ② *j-..-ev/-av*, ③ *j-..-et/-at* の 3 種類のパターンがある。ただし、①②③の使い分けは、今のところ明らかではない（後部要素 *-ev/-av, -et/-at* については、次節で考察する）。

### 5.1.1. *j-*

非派生自動詞語幹に *j-* が接頭されたと考えられる例は、管見のかぎりでは 1 例のみである。Zhukova (1972) では、自動詞語幹に *j-* が付加された語として、この他、*j-iwl-ə-k* 「連れ出す」、*j-ə-ne-k* 「運び出す」、*j-ə-le-k* 「連れて行く」、*j-ə-me-k* 「押し込む」を挙げているが、*iwl, ne, le, me* といった自動詞語幹は確認されていない。また、もう 1 例あげている *j-ə-kav-ə-k* 「慣らす」の語幹 *kav* は「慣れる」の意味の自動詞である。しかし、語幹末の *-av* の部分については使役化の *j-..-ev/-av* の後半部である可能性も否定できないため、ここでは取り上げない。

<自動詞>

<他動詞>

*paŋawjij-ə-k* 「休む」 → *j-ə-paŋawjij-ə-k* 「休ませる」

(13) *ənno paŋawjij-i-Ø, əmɬu=qun uvik-Ø metʃaŋ ko-tva-ŋ-Ø.*  
 3SG.ABS rest-PF-3S.S so body-ABS.SG well IPF-be-IPF-3SG.S  
 「彼は休んだので、体調がよい。」

(14) *ə-nan j-ə-paŋawjij-ni-n-Ø kəmiŋ-ə-n, məjew amu*  
 3SG-ERG CAUS-E-rest-3SG.A-3SG.O-PF child-E-ABS.SG because probably  
*ye-peŋʃivel-lin.*  
 RES-get.tired-3SG.S  
 「彼は子供を休ませた、なぜなら（子供は）疲れたからだ。」

### 5.1.2. *j-..-ev/-av*

一方、*j-..-ev/-av* により自動詞から他動詞が派生された例は多い。

<自動詞>

<他動詞>

*ceŋəto-k* 「現れる」 → *j-ə-ceŋəto-v-ə-k* 「現わす」  
*ɣəjəl-ə-k* 「学ぶ」 → *j-ə-ɣəjəl-av-ə-k* 「教える」  
*itit-ə-k* 「煮える」 → *j-itit-ev-ə-k* 「煮る」  
*jale-k* 「櫓で滑る」 → *j-ə-jale-v-ə-k* 「櫓で滑らす」  
*jawwaca-k* 「びっこになる」 → *j-ə-jawwaca-v-ə-k* 「びっこにする」

jəqejo-k 「腐る」	→	j-ə-jqejo-v-ə-k 「腐らせる」
kawja-k 「擦れる」	→	j-ə-kawja-v-ə-k 「擦る」
kəmʔəli-k 「回る」	→	j-ə-kəmʔəli-v-ək 「回す」
ŋəpe-k 「降りる」	→	j-ə-ŋpe-v-ə-k 「降ろす」
pəʔa-k 「乾く」	→	j-ə-pʔa-v-ə-k 「乾かす」
qamanci-k 「ひっくり返る」	→	j-ə-qamci-v-ə-k 「ひっくり返す」

(15) は自動詞 qamanci-k 「ひっくり返る」の例文, (16) は他動詞 j-ə-qamci-v-ə-k 「ひっくり返す」の例文である。

(15) Wutken ʔətvəʔət qamanci-j-Ø.  
today boat(ABS.SG) turn.over-PF-3SG.S  
「今日, 一艘のボートがひっくり返った。」

(16) əcy-ə-nan ʔətvəʔət na-n-qamanci-v-ə-n-Ø.  
3PL-E-ERG boat(ABS.SG) INV-CAUS-turn.over-CAUS<sup>6</sup>-E-3SG.O-PF  
「彼らはボートをひっくり返した。」

### 5. 1. 3. j-...-et/-at

j-...-et/-at により自動詞から他動詞が派生された例も, j-...-ev/-av 同様多い。

<自動詞>	→	<他動詞>
emtejp-ə-k 「積まれる」	→	j-emtejp-at-ə-k 「積む」
ewji-k 「食べる」 <sup>7</sup>	→	j-ewj-et-ə-k 「食べさせる」
ʔujev-ə-k 「現れる」	→	j-ə-ʔujev-et-ə-k 「現わす」
ʔemjij-ə-k 「伸びる」	→	j-ə-ʔemjij-et-ə-k 「伸ばす」
iwtətve-k 「降りる」	→	j-iwtətve-t-ə-k 「降ろす」
jajt-ə-k 「帰る」	→	j-ə-jajt-at-ə-k 「帰す」
ləy-ə-k 「溶ける」	→	j-ə-ləy-at-ə-k 「溶かす」

<sup>6</sup> -ev/-av 自体が使役化の機能を担わないということは, 本稿の後半部分で明らかにされるが, ここではとりあえず便宜的に, グロスに CAUS と付しておく。

<sup>7</sup> 自動詞 ewji-k 「食べる」には対応する他動詞 ju-kkə 「～を食べる」がある。ju の基底形は nu, 語頭で ju に交替する。ju-kkə では, S は A に変換される。例文(a)(b)の基本的な意味は同じであるが, 主語, 目的語のいずれが前景化するかが異なる。なお, 前景化する名詞項は絶対格を, 背景化する名詞項は斜格を取るか削除される。すなわち, (a)では主語の「私」が前景化し, (b)では目的語の「肉」が前景化する。

(a) (ʔəmmo) t-ewji-k kinuŋva-ta.  
1SG.ABS 1SG.S-eat-PF meat-INSTR

(b) (ʔəm-nan) t-ə-nu-n-Ø kinuŋji-Ø  
1SG-ERG 1SG.A-E-eat-3SG.O-PF meat-ABS.SG  
「私は肉を食べた。」

piq-ə-k 「隠れる」	→	j-ə-piq-et-ə-k 「隠す」
qit-ə-k 「凍る」	→	j-ə-qit-at-ə-k 「凍らせる」
wajŋ-ə-k 「消える」	→	j-ə-wajŋ-at-ə-k 「消す」
kəjotve-k 「広がる」	→	jəkjotv-at-ə-k 「広げる」

(17) は自動詞 wajŋ-ə-k 「消える」の例, (18) は他動詞 j-ə-wajŋ-at-ə-k 「消す」の例である。

(17) Mily-ə-n wajŋ-e-Ø.  
fire-E-ABS.SG go.out-PF-3SG.S  
「火が消えた。」

(18) ŋənvəq ŋujemtevilŋ-u na-n-wajŋ-at-ə-n-Ø kenγəken.  
many man-ABS.PL INV-CAUS-go.out-CAUS-E-3SG.O-PF fire(ABS.SG)  
「たくさんの人たちが火事を消した。」

## 5.2. 逆使役化

他動詞から自動詞を派生する場合には, 逆使役化接辞 -ŋt が接尾される。この際, -et/-at がさらに付加される。また, -ŋt がつかずに -et/-at のみで逆使役化する例も非常に少ないが観察される。

### 5.2.1. -ŋt-et/-ŋt-at

<他動詞>	→	<自動詞>
kocy-ə-k 「破る」	→	kocy-ə-ŋt-at-ə-k 「破れる」
pəj-ə-k 「剥く」	→	pəj-ə-ŋt-et-ə-k 「剥ける」
jəcc-ə-k 「ほどく」	→	jəcc-ə-ŋt-at-ə-k 「ほどける」

(19) は他動詞 jəcc-ə-k 「ほどく」, (20) は自動詞 jəcc-ə-ŋt-at-ə-k 「ほどける」の例である。

(19) Mik-ne-k amu ya-cc-ə-lin-Ø yəmnin inəŋjəcŋ-ə-n.  
who-AN-LOC(ERG) probably RES-untie-E-3SG.O-3SG.A my load-E-ABS.SG  
「どうやら誰かが私の荷物をほどいたようだ。」

(20) Amu ənkəjep ya-cc-ə-ŋt-al-lin kəltəyiŋ-ə-n  
Probably long.ago RES-untie-E-AC-ET<sup>8</sup>-3SG.S knot-E-ABS.SG  
ujetiki-kin-Ø.  
sledge-REL-ABS.SG  
「橇の結び目はどうやらずっと前にほどけたようだ。」

<sup>8</sup> この -et/-at は機能が特定できないために, 暫定的に ET とグロスを施しておく(以後も同様)。

### 5.2.2. -et/-at

-et/-at のみで逆使役を派生している語として、次のペアがこれまでの調査で得られている。

<他動詞>		<自動詞>
təŋla-k 「腐らせる」	→	təŋla-t-ə-k 「腐る」
pela-k 「残す」	→	pela-t-ə-k 「残る」

次の (21) は他動詞 *pela-k* 「残す」の例、(22) は自動詞 *pela-t-ə-k* 「残る」の例である。

- (21) *ɣəm-nan t-ə-pela-n-Ø akək-Ø jaja-k.*  
 1SG-ERG 1SG.A-E-leave-3SG.O-PF son-ABS.SG house-LOC  
 「私は家に息子を残した。」

- (22) *Akək-Ø jaja-k pelat-e-Ø.*  
 son-ABS.SG house-LOC remain-PF-3SG.S  
 「息子は家に残った。」

### 5.3. 自他同形

自動詞・他動詞に派生関係がなく、同形をなすものには次のような語がある。

<自動詞・他動詞>

<i>mæctku-k</i> 「(ばらばらに) 折れる」「折る」
<i>məle-k</i> 「折れる」「折る」
<i>ilyətev-ə-k</i> 「きれいになる」「きれいにする」
<i>cəŋat-ə-k</i> 「割れる」「割る」
<i>wəŋjojp-ə-k</i> 「開く (自・他)」
<i>lejuv-ə-k</i> 「歩く」「連れていく」
<i>ŋəvo-k</i> 「始まる」「始める」
<i>pəl'ətku-k</i> 「終わる」「終える」

次の (23)(24) は、*məle-k* 「折れる」「折る」の例である。

- (23) *Uttəʔut məle-j-Ø.*  
 wood(ABS.SG) break-PF-3SG.S  
 「木が折れた。」

- (24) *ɣəm-nan uttəʔut t-ə-mle-n-Ø.*  
 1SG.ERG wood(ABS.SG) 1SG.A-E-break-3SG.O-PF  
 「私は木を折った。」



#### 5.4. 補充法 suppletive

<自動詞>	<他動詞>
ajup-ə-k 「刺さる」	tənpə-k 「刺す」
ηəto-k 「出る」	eto-k 「出す」
ʎujet-ə-k 「生まれる」	jəto-k 「生む」
vəccet-ə-k 「見える」	ləʎu-k 「見る」

次の(25) は自動詞 ηəto-k 「出る」, (26) は他動詞 eto-k 「出す」 の例である。

- (25) Pipikəl'η-ə-n      ηəto-j-Ø      wanv-ə-cko-ηqo.  
 mouse-E-ABS.SG    go.out-PF-3SG.S    hole-E-inside-ABL  
 「ネズミが穴の中から出てきた。」

- (26) ʎəm-nan      t-eto-n-Ø      pipikəl'η-ə-n      wanv-ə-cko-ηqo.  
 1SG-ERG    1SG.A-let.out-3SG.O-PF    mouse-E-ABS.SG    hole-E-inside-ABL  
 「私はネズミを穴の中から出した。」

この他, 共通の副詞と異根の動詞ペア nəʎel-ə-k 「なる」 (自動詞) / jəcc-ə-k 「する」 (他動詞) で自動詞と他動詞が派生される場合がある。

<自動詞>	<他動詞>
alvaŋ nəʎel-ə-k 「変わる」	alvaŋ jəcc-ə-k 「変える」
janotəŋ nəʎel-ə-k 「進む」	janotəŋ jəcc-ə-k 「進める」

次は, (27) alvaŋ nəʎel-ə-k 「変わる」 と(28) alvaŋ jəcc-ə-k 「変える」 の例である。

- (27) ənno      alvaŋ      nəʎel-i-Ø,      məjew      unmək  
 3SG.ABS    in.many.ways    become-PF-3SG.S    because    very.much  
 k-ewwece-ηvo-η-Ø.  
 IPF-drink-HAB-IPF-3SG.S  
 「彼は大酒を飲んでいるから, 変わってしまった。」

- (28) ə-nan      alvaŋ      ʎe-cc-ə-lin-Ø      ujetik-Ø,  
 3SG-ERG    in.many.ways    RES-do-E-3SG.O-3SG.A    sledge-ABS.SG  
 emʎu=qun    inʎe    cimat-i-Ø  
 therefore    soon    break-PF-3SG.S  
 「彼は橇を変形させてしまった, だからすぐに壊れた。」

## 5.5. 使役化か？両極化か？

以上のような形態的対応が明確なパターンとは別に、パターンの特定が難しい動詞ペアが数多く見られる。これは、自動詞 -et/-at, 他動詞 j-..ev/-ev の対応を示す場合である。

## &lt;自動詞&gt;

cim-at-ə-k 「壊れる」  
 kəmʃələlʃ-at-ə-k 「転がる」  
 pawciŋ-at-ə-k 「関心をもつ」  
 mejŋ-et-ə-k 「成長する」  
 tumy-et-ə-k 「仲良くする」  
 jiʃ-et-ə-k 「喜ぶ」  
 pawjaq-at-ə-k 「さびしがる」  
 keny-et-ə-k 「燃える」  
 ʃin'ŋ-at-ə-k 「倒れる」  
 vetɣ-at-ə-k 「まっすぐである」  
 wic-et-ə-k 「腐る」  
 kaŋ-at-ə-k 「かがむ」  
 om-at-ə-k 「暖かい」  
 ekmtq-et-ə-k 「貼りつく」  
 jəʃel-et-ə-k 「ごちゃ混ぜになる」  
 avəl'q-at-ə-k 「鈍い」  
 ʃatkeŋ-at-ə-k 「悪くなる」  
 acacy-at-ə-k 「笑う」  
 tekj-et-ə-k 「降りる」  
 eŋʃ-et-ə-k 「心配する」  
 ɣəl-et-ə-k 「熱い」  
 mək-at-ə-k 「多い」  
 əppul'-at-ə-k 「小さくなる」  
 im-at-ə-k 「濃い」  
 wil-et-ə-k 「濡れる」  
 ɣam-at-ə-k 「強くなる」  
 wəl'q-et-ə-k 「弱い」  
 icv-et-ə-k 「鋭い」  
 upəl'ʃ-at-ə-k 「突き通す」

## &lt;他動詞&gt;

j-ə-cim-av-ə-k 「壊す」  
 j-ə-kəmʃəlʃ-av-ə-k 「転がす」  
 j-ə-pawciŋ-av-ə-k 「関心をもたせる」  
 j-ə-mejŋ-ev-ə-k 「育てる」  
 j-ə-tumy-ev-ə-k 「仲良くさせる」  
 j-ə-jiʃ-ev-ə-k 「喜ばせる」  
 j-ə-pawjaq-av-ə-k 「さびしがらせる」  
 j-ə-keny-ev-ə-k 「燃やす」  
 j-ə-ʃin'ŋ-av-ə-k 「倒す」  
 j-ə-vetɣ-av-ə-k 「まっすぐにする」  
 j-ə-wic-ev-ə-k 「腐らせる」  
 j-ə-kaŋ-av-ə-k 「かがませる」  
 j-om-av-ə-k 「暖める」  
 j-ekmətq-ev-ə-k 「貼りつける」  
 j-ə-cʃel-ev-ə-k 「ごちゃ混ぜにする」  
 j-avəl'q-av-ə-k 「鈍くする」  
 j-ə-ʃatkeŋ-av-ə-k 「悪くする」  
 j-acacy-av-ə-k 「笑わせる」  
 j-ə-tekj-ev-ə-k 「降ろす」  
 j-eŋʃel-ev-ə-k 「心配させる」  
 j-ə-tyəl-ev-ə-k 「熱くする」  
 j-ə-mk-av-ə-k 「多くする」  
 j-əppul'-av-ə-k 「小さくする」  
 j-im-av-ə-k 「濃くする」  
 j-ə-wil-ev-ə-k 「濡らす」  
 j-ə-tyəm-av-ə-k 「強くする」  
 j-ə-wəl'q-ev-ə-k 「弱くする」  
 j-icv-ev-ə-k 「鋭くする」  
 j-upəl'ʃ-av-ə-k 「突き通す」

これらのペアを見ると、表面的には共通語幹に、自動詞の場合には -et/-at が、他動詞の場合には j-..ev/-av が付加されて派生された両極化のパターンを示すように見える。ちなみに、チュクチ語にも同様のペアがあり、呉人徳司 (1997) はこれらを両極化とみなしている (他動詞に接頭している r- はコリヤーク語の j- に対応)。

(29)

＜自動詞＞		＜他動詞＞
keŋ-et 「曲がる」	⇔	r-ə-keŋ-ew 「曲げる」
peqet-at 「倒れる」	⇔	r-ə-peqet-aw 「倒す」
ŋl-et 「燃える」	⇔	r-ə-ŋl-ew 「燃やす」
umek-et 「集まる」	⇔	r-umek-ew 「集める」
sim-et 「壊れる」	⇔	r-ə-sim-ew 「壊す」
kək-w-at 「乾く」	⇔	r-ə-kək-w-aw 「乾かす」
mejŋ-et 「育つ」	⇔	r-ə-mejŋ-ew 「育てる」

(呉人徳司 1997:87)

しかし、後述のように自動詞につく -et/-at, 他動詞につく -ev/-av はそれ自体が自動詞化、他動詞化の機能を持っているとはいえない。ゆえに表面的な形式的対応だけを根拠に両極化と判断するのは難しいように思われる。

ちなみに、-ev/-av, -et/-at は j- をともなわず単独でもかなり生産的に用いられる。すなわち、-ev/-av は形容詞や名詞語幹に付加され、変化を表す動詞を形成する。ただし、名詞語幹に付加された語例は非常に少ない。

(30) 【形容詞語幹】 mijk-ev-ə-k 「軽くなる」(mijk 「軽い」), mel-ev-ə-k 「よくなる」(mel 「よい」), icc-ev-ə-k 「重くなる」(icc 「重い」), ənp-ev-ə-k 「年取る」(ənp 「年取った」), ŋot-av-ə-k 「怒り出す」(ŋot 「怒った」), kim-av-ə-k 「遅れる」(kim 「のろい」), pəl'ep-av-ə-k 「直る」(pəl'ep 「真っ直ぐな」)

(31) 【名詞語幹】 jejjwel-ev-ə-k 「孤児になる」(jejjwel 「孤児」), qajtumy-av-ə-k 「親戚になる」(qajtumy 「親戚」), ŋajq-av-ə-k 「汚れる」(ŋajqəŋaj 「埃」)

ところが、このように名詞語幹や形容詞語幹に-ev/-av がついて派生された動詞はすべて自動詞で、他動詞活用する例はみられない。すなわち、-ev/-av 自体には他動詞化の機能はないといえる。

(32) ɣəmmo t-ə-jejjwel-ev-ə-k-Ø to qin'wat=qun  
1SG.ABS 1SG.S-E-orphan-become-E-1SG.G-PF and immediately  
ne-ləqtet-ɣəm-Ø internat-etəŋ.  
INV-send-1SG.O-PF boarding.school-ALL  
「私は孤児になったので、すぐに寄宿舎に送られた。」

(33) ɣəmnin apappo-Ø unmək ɣe-np-ew-lin,  
my grandfather-ABS.SG very.much RES-old-become-3SG.S

amu məjew təʔəl-cij-ə-k.  
 probably because be.sick-INT-E-LOC  
 「私の祖父は病気がちなのでひどく年老いた。」

一方, -et/-at はさらに多機能的である。

① 動詞派生

形容詞語幹に付加されて一時的状態<sup>9</sup>や時には変化を表す<sup>10</sup>動詞を形成したり, 名詞語幹に付加されてその名詞に関する動作をおこなうことを表わしたりする。

(34) 【形容詞語幹】 yəl-et-ə-k 「熱い」(yəl 「熱い」), jiʔ-et-ə-k 「喜んでいる」(jiʔ 「嬉しい」), mejn-et-ə-k 「大きくなる」(mejn 「大きい」), untəm-et-ə-k 「穏やかな」(untəm 「穏やかな」), cəqq-et-ə-k 「冷たい」(cəqq 「冷たい」), iy-et-ə-k 「涼しい」(iy 「涼しい」)

(35) 【名詞語幹】 ŋəl-et-ə-k 「燃える」(ŋəl 「煙」), wil-et-ə-k 「湿る」(wil 「発酵した魚」), jəcʔ-et-ə-k 「満たす」(jəcʔ 「中身」), mily-et-ə-k 「点火する」(mily 「火」), ajkol-at-ə-k 「蒲団を敷く」(ajkol 「蒲団」), wan'av-at-ə-k 「話す」(wan'av 「ことば」), kətəy-at-ə-k 「風が吹く」(kətəy 「風」), kəl'al-at-ə-k 「ビーズで飾る」(kəl'al' 「ビーズの飾り」)

このうち, 形容詞語幹から派生された場合は, 自動詞活用する。

(36) ənno unmək ku-jiʔ-et-ə-ŋ-Ø, məjew akək-Ø  
 3SG.ABS very.much IPF-glad-VBL-E-IPF-3SG.S because son-ABS.SG  
 ya-jajt-ə-len.  
 RES-return-E-3SG.S  
 「彼は息子が帰ってきたので, とても喜んでいる。」

しかし, 名詞語幹から派生された場合には, 自動詞になる場合 (37) も, 他動詞になる場合 (38) もある。ただし, 自動詞になるか他動詞になるかが名詞語幹のどのような特徴によるものかは今のところ明らかではない。

<sup>9</sup> コリヤーク語では恒常的な属性を表わす場合 (属性叙述) と一時的状態を表わす場合 (事象叙述) では異なる形式が用いられる。すなわち, 前者の場合には形容詞語幹に n-...qin/-qen が付加される (n-ə-ŋot-qin 「(恒常的に) 怒りっぽい」)。一方, 一時的状態を表わす場合には, -et/-at をつけて動詞の非未来不完了形で表わす (ko-ŋot-at-ə-ŋ 「(一時的に) 怒っている」)(呉人惠 2010a, 2012)。

<sup>10</sup> 形容詞語幹が表す時間的安定性の度合いにより, -et/-at が状態を表すのか変化を表すのかが違ってくることについては, 呉人惠 (2010b) で詳述されている。

(37) ɲajɲən unmək ko-kteɣ-at-ə-ŋ-Ø.  
 outside very.much IPF-wind-VBL-E-IPF-3SG.S  
 「外はひどく風が吹いている。」

(38) əccaj-na-k je-jəcɣ-en-ŋ-ə-ni-n cejucɣ-ə-n .  
 ant-AN-LOC(ERG) FUT-content-VBL-FUT-E-3SG.A-3SG.O bag-E-ABS.SG  
 vitɣ-e  
 moss-INSTR  
 「おばさんは袋に苔を詰めるだろう。」

② 逆使役化

上述のとおり，例は少ないが，-et/-at は他動詞から自動詞を派生する逆使役化の際にも用いられる。(39) は-at により逆使役化された例，(40) は他動詞の例である。

(39) Akək-Ø jaja-k pel-at-e-Ø  
 son-ABS.SG house-LOC leave-AC-PF-3SG.S  
 「息子は家に残った。」

(40) ɣəm-nan jaja-k t-ə-pela-n-Ø akək-Ø.  
 1SG-ERG house-LOC 1SG.A-E-leave-3SG.O-PF son-ABS.SG  
 「私は息子を家に残した。」

① 逆受動化

ine-/ena- が他動詞語幹に接頭して逆受動化が起こる際に，-et/-at が同時に接尾されることがある。(41) は他動詞語幹 pəl 「～を飲む」<sup>11</sup>による他動詞文の例，(42) は逆受動化した inelpet 「飲む」の自動詞文の例である。逆受動化により，目的語が道具格を取り脱焦点化することに注意されたい。

(41) ə-nan pəl-ni-n-Ø cəq-miməl-Ø əməl'kok-ə-ŋqo.  
 3SG-ERG drink-3SG.A-3SG.O-PF cold-water-ABS.SG dipper-E-ABL  
 「彼は柄杓から冷たい水を飲んだ。」

(42) Kawi-Ø ɣ-ine-lp-el-lin ɣeqe-miml-e, jeqqe  
 Kawi-ABS.SG RES-AP-drink-ET-3SG.S bad-water-INSTR what's.more  
 jaqam ɣe-jəlqel-lin.  
 immediately RES-sleep-3SG.S

<sup>11</sup>この他動詞語幹の基底形は **lp** であるが，語頭では音位転換を起こして pəl になる (ə は語頭の子音連続を避けるための挿入母音)。

「カウイは酒を飲んで、すぐに寝てしまった。」

ただし、すべての場合に *-et/-at* が付加されるわけではない。*-et/-at* が付加される条件については今のところ明らかにしていない。

以上から、*-ev/-av* 自体には自動詞を他動詞にする機能はないことが明らかである。また、*-et/-at* は動詞形成機能を果たすとともに、使役化、逆使役化、逆受動化のいずれの場合にも出現することから、*-et/-at* 自体に他動詞を自動詞に変えたり、自動詞を他動詞に変えたりする機能があるとはいえないことがわかる。

そこで、さきにあげた *-et/-at : j-...-ev/-av* の自他動詞ペアを語幹の語類によって整理し直すと、次のようになる。(43) が名詞語幹, (44) が形容詞語幹, (45) が語類の不明なものである。

(43) 【名詞語幹】

tumy-et-ə-k 「仲良くする」	— j-ə-tumy-ev-ə-k 「仲良くさせる」 (tumy 「友」)
keny-et-ə-k 「燃える」	— j-ə-keny-ev-ə-k 「燃やす」 (keny 「火事」)
acacy-at-ə-k 「笑う」	— j-acacy-av-ə-k 「笑わせる」 (acacy 「笑い」)
ηəl-et-ə-k 「燃える」	— j-ə-ηl-ev-ə-k 「燃やす」 (ηəl 「煙」)
wil-et-ə-k 「濡れる」	— j-ə-wil-ev-ə-k 「濡らす」 (wil 「発酵した魚」)
om-at-ə-k 「暖かい」	— j-om-av-ə-k 「暖める」 (om 「暖かさ」)

(44) 【形容詞語幹】

pawciŋ-at-ə-k 「関心をもつ」	— j-ə-pawciŋ-av-ə-k 「関心をもたせる」 (pawciŋ 「好奇心のある」)
mejŋ-et-ə-k 「成長する」	— j-ə-mejŋ-ev-ə-k 「育てる」 (mejŋ 「大きい」)
jiŋ-et-ə-k 「喜ぶ」	— j-ə-jiŋ-ev-ə-k 「喜ばせる」 (jiŋ 「嬉しい」)
pawjaq-at-ə-k 「寂しがる」	— j-ə-pawjaq-av-ə-k 「寂しがらせる」 (pawjaq 「寂しい」)
ʃin'ŋ-at-ə-k 「倒れる」	— j-ə-ʃin'ŋ-av-ə-k 「倒す」 (hin'ŋ 「倒れやすい」)
vety-at-ə-k 「真直ぐである」	— j-ə-vetyavək 「真直ぐにする」 (vety 「まっすぐな」)
ekmətq-et-ə-k 「貼りつく」	— j-ekmətq-ev-ə-k 「貼りつける」 (kmətq 「べたべたの」)
jəŋel-et-ə-k 「ごちゃ混ぜになる」	— j-ə-cŋel-ev-ə-k 「ごちゃ混ぜにする」 (jəŋel 「ごっちゃの」)
avəl'q-at-ə-k 「鈍い」	— j-avəl'q-av-ə-k 「鈍くする」 (avəl'q 「鈍い」)
ʃatkeŋ-at-ə-k 「悪くなる」	— j-ə-ʃatkeŋ-av-ə-k 「悪くする」 (ʃatkeŋ 「悪い」)
eŋŋ-et-ə-k 「心配する」	— j-eŋŋel-ev-ə-k 「心配させる」 (eŋŋ 「心配している」)
tyəl-et-ə-k 「熱い」	— j-ə-tyəl-ev-ə-k 「熱くする」 (tyəl 「熱い」)
mək-at-ə-k 「多い」	— j-ə-mk-av-ə-k 「多くする」 (mək 「多い」)
əppul'-at-ə-k 「小さくなる」	— j-əppul'-av-ə-k 「小さくする」 (əppul' 「小さい」)
imat-ə-k 「濃い」	— jim-av-ə-k 「濃くする」 (im 「濃い」)
tyəm-at-ə-k 「強くなる」	— j-ə-tyəm-av-ə-k 「強くする」 (tyəm 「強い」)
wəl'q-et-ə-k 「弱い」	— j-ə-wəl'q-ev-ə-k 「弱くする」 (wəl'q 「弱い」)
icv-et-ə-k 「鋭い」	— j-icv-ev-ə-k 「鋭くする」 (icv 「鈍い」)

(45) 【不明な語幹】

cim-at-ə-k 「壊れる」	— j-ə-cim-av-ə-k 「壊す」
kəmʃələlʃ-at-ə-k 「転がる」	— j-ə-kəmʃəlʃ-av-ə-k 「転がす」
wic-et-ə-k 「腐る」	— j-ə-wic-ev-ə-k 「腐らせる」
kaŋat-ə-k 「かがむ」	— j-ə-kaŋ-av-ə-k 「かがませる」
jun-et-ə-k 「暮らす」	— j-ə-jun-ev-ə-k 「暮らさせる」
təkj-et-ə-k 「降りる」	— j-ə-təkj-ev-ə-k 「降ろす」

(45) の語幹の語類が明らかにならないため、断言は避けなければならないが、以上から、-et/-at はほぼ名詞や形容詞語幹から動詞を形成するために付加されていることがわかる。したがって、-et/-at : j-...-ev/-av の対応は、両極化ではなく、使役化とみなすのが適切であるように思われる。すなわち、使役化の機能を担っているのは j- のみで、-ev/-av は、使役化の補助的な標識として -et/-at と交替したものであると考えられる。もしこのようにみなすならば、Nichols et al. (2004) のあげた自他対応のサンプルに対応するコリヤーク語は次のようになり、有生動詞の場合にも無生动詞の場合にも使役化が顕著であることがわかる。また両動詞の違いは、その他のパターンとして前者では異根動詞が、後者では自他同形がみられる点であることがわかる。ただし、このリストからはその他のパターン、すなわち逆使役のパターンの存在はうかがい知ることができない。

表 8 : コリヤーク語の自他対応の形態的タイプ

	使役化	自他同形	補充形	高	タイプ
有生	6	0	3	使役化	他動詞化
無生	7	2	0	使役化	他動詞化

## 6. おわりに

本稿では、コリヤーク語の自動詞・他動詞の形態的対応に関する記述をおこなうとともに、その類型論的な位置づけを試みた。類型論的位置づけを画定するにあたって特に問題となるのは、従来、両極形と考えられてきた -et/-at (自動詞) : j-...-ev/-av (他動詞) というきわめて生産的にみられる自他の対応関係である。本稿では、-et/-at ならびに -ev/-av の意味機能や形態的特徴について再検討することにより、両者にはそれぞれ自体に自動詞化、他動詞化の機能はなく、他動詞化の機能を担っているのは接頭辞の j- であると結論づけた。このように考えると、コリヤーク語には両極化を示すパターンはなく、代わりに使役化を自他対応の主要な手段とする他動詞化型言語であるということになる。このことは Nichols et al. (2004) の予想に反して、チュクチ語にもあてはまるであろう。このことはさらに、北アジアの諸言語に他動詞化型言語が多いという Nichols et al. (2004) の指摘にも合致する。

とはいえ、コリヤーク語には北アジアの対格型言語にはない特徴があることも忘れてはならない。本稿では扱わなかったが、能格型が形態や統語の各所にみられるコリヤーク語では O-affecting な自他対応の形態的手段もきわめて発達しているということである。特に指摘しておきたいのは、A-affecting な自他対応で見られたパターンが O-affecting な自他対

応にも対称的にみられることである。たとえば、S=A で O の斜格への降格や削除を引き起こす逆受動化接辞 (-ine/-ena, -cit/-cet, -tku/-tko), 異根動詞のペア (ewjik「食べる(自)」-jukko「～を食べる(他)」), 自他同形 (valomək「聞く(自)」「～を聞く(他)」) などである。したがって、コリヤーク語の「他動詞化型」というタイプの持つ意味は、他の北方諸言語のそれとは様相を異にするものであるということも併せて考えておく必要がある。この点についての議論は改めて別稿を設けておこないたいと考えている。

### 略語表

A=transitive subject	ABL=ablative	ABS=absolutive	ALL=allative
AN=animate	CAUS=causative	DU=dual	E=epenthesis
ERG=ergative	HAB=habitual	INSTR=instrumental	INT=intensive
INV=inverse	IPF=imperfective	LOC=locative	NML=nominalizer
O=object	PF=perfective	PL=plural	REL=relational
RES=resultative	S=intransitive subject	SG=singular	VBL=verbalizer
1=first person	2=second person	3=third person	

### 参考文献

- 呉人 惠 (2002) 「コリヤーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107-125.
- 呉人 惠 (2010a) 「コリヤーク語の属性叙述－主題化のメカニズムを中心に」『言語研究』138:115-147.
- 呉人 惠 (2010b) 「時間的安定性から見たコリヤーク語の形容詞事象叙述文」呉人惠編『環北太平洋の言語』15: 31-44. 富山大学人文学部.
- 呉人徳司 (1997) 「チュクチ語の自動詞・他動詞の形態的対応」宮岡伯人・津曲敏郎編『環北太平洋の諸言語』3: 97-112. 京都大学大学院文学研究科.
- 呉人徳司 (2001) 「チュクチ語の使役構造の輪郭－自動詞・他動詞との関わりを通じて」『アジア・アフリカ言語文化研究』61: 129-148.
- 呉人徳司 (2009) 「チュクチ語の結合価の変更について」『アジア・アフリカの言語と言語学』4: 111-132.
- 小野智香子(2001) 「イテリメン語の動詞の自他」『ユーラシア諸言語の動詞論』1: 19-26. 千葉大学社会文化科学研究科.
- Comrie, Bernard (2006) Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability, *Linguistics* 44-2: 303-318.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternation. In: Comrie, Bernard and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*. 87-120. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Inenlikej, P. I., V. P. Nedjalkov and A. A. Xolodovich (1969) Kauzativ v Chukotskom jazyke. In: Xolodovich, A.A. (ed.) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij: Morfologicheskij kauzativ*.



260-270. Leningrad.

- Kibrik, A.E., Kodzasov S.V. and Muravyova, I.A. (2004) *Language and folklore of the Alutor people*. ELPR Publication Series A2-042 Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Koptjevskaja-Tamm, M. and Muravyova, I.A. (1993) Alutor causatives, noun incorporation, and the mirror principle. In: Comrie, Bernard and Maria Polinsky (eds.) *Causative and Transitivity*. 287-313. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. .
- Kozinsky, I.Sh., Nedjalkov, V.P. and Polynskaja, M.S. (1988) Antipassive in Chukchee: oblique object, object incorporation, zero object”, In: M. Shibatani (ed.) *Passive and Voice*. 651-706. Amsterdam: John Benjamins.
- Kurebito, Tokusu (2008) Valency-changing in Chukchi. *Linguistic Typology of the North* 1: 73-86. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Kurebito, Tokusu (2012) An outline of valency-reducing operations in Chukchi. In: Wataru Nakamura & Ritsuko Kikusawa (eds.) *Objectivization and Subjectivization: A Typology of the Voice Systems*, Senri Ethnological Studies 77: 177-189. Suita: National Museum of Ethnology.
- Nagayama, Yukari (2003) *Očerki grammatiki aljutorskogo jazyka*. ELPR A2-038. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Nichols, Johanna, David Peterson, and Jonathan Barnes (2004) Transitivity and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8-2: 149-211.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R.M.W.Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian languages*. 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Skorik, Petr Ja. (1977) *Grammatika Chukotskogo jazyka II*. Leningrad: Izdatel'stvo akademii nauk SSSR.
- Thompson, Della et al.(eds.) *The Oxford Russian Dictionary. Third edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Zhukova, Alevtina N. (1967) *Russko-korjaksij slovar'*. Moskva: Sovetskaja ensiklopedija.
- Zhukova, Alevtina N. (1972) *Grammatika korjaksogo jazuka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Intransitive/Transitive Verb Alternation in Koryak:  
Neutral or Transitivity?

Megumi KUREBITO  
(University of Toyama)

This paper describes morphological intransitive/transitive verb alternation in Koryak and aims to characterize it according to a typological perspective. There is one problematic pattern for the characterization of morphological intransitive/transitive alternation in Koryak: the intransitive/transitive pair formed by the productive affixes, *-et/-at* (intr.) and *j-...-ev/-av* (tr.), which has been regarded as an example of equipollent alternation. Through the examination of both semantic and morphological features of the suffixes, the present paper clarifies that the suffixes themselves have neither a detransitivizing nor a transitivity function and that only the prefix *j-* bears the function of transitivity. This analysis reveals that Koryak is a highly transitivity language, a finding that agrees well with Nichols et al.'s (2004) suggestion that in North Asia, transitivity is more prevalent and frequent than any other types of intransitive/transitive verb alternation.

(くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp)